

神奈川県植物研究史補遺(1)

小 原 敬

Takashi OBARA: Supplement to the History of Floristic Work in
Kanagawa Prefecture, Japan (1)

本年(1991)はわが国と当神奈川県の植物研究史にとってまれにみる当り年であった。わが国の植物研究に計り知れない影響を与えたケンベルが初回の江戸参府に随行して300年、帝政ロシアの植物学者マクシモヴィッチが箱館(後の函館)から回航して最初に神奈川県に足跡を印して130年、また彼の急逝から100年目にあたる。

さらに、サンクト・ペテルブルグのロシア科学アカデミー・コマロフ植物研究所が所蔵し、1982年にアレシナが詳しいリストを発表している「シーボルト日本植物原画集」981枚を木村陽二郎先生が確認の上報文を発表されている。なおアレシナのリストについては拙文『日露植物交流雑記』X(1984)XI(1985)、などにおいても紹介しておいた。

先年『神奈川県植物誌、1988』に「神奈川県植物研究史I」を発表してすでに3年を経過し、補遺、訂正を必要とする箇所が散見されるようになったので、以下少しく気付いた点を述べてみたい。

○西行の砥上が原の歌(県植物誌, p. 1345)

『新編鎌倉志』(1685), 『鎌倉攬勝考』(1829)では「柴松の葛のしげみに妻(霧)こめて、砥上が原に小鹿なくなり」となっている。しかし『新編相模国風土記稿』(1832—40)では「芝まとふ葛のしげみに妻籠めて砥上か原に牡鹿鳴くなり」となっていて、少し語句が異なっている。いずれにしても西行の頃には片瀬の西側地域は葛が生い繁り、それを餌とする鹿が多く棲んでいたらしい。

○J. ブライン(ブレイン, プレニウス, Jacob Breynne 1637—97, ダンツィヒ(グダニスク)の豪商, 植物学者)(県植物誌, p. 1346)

1674年来日したオランダ商館医ライネはJ. ブラインにクスノキやチャなどの標本を贈っている。J. ブラ

インはまた1689年にキク(*Matricaria japonica*)とその変種を発表している。1682年と1865年来航した商館長クライエルや園芸家マイステルも彼にわが国の植物標本を送っているが、それらは後に英国のスローン(Hans Sloane 1660—1753)の手に渡り、今では大英博物館(自然誌)に収蔵されているという。

彼に献名された属名に *Breynia* L. 1753 (= *Capparis* L. 1753. フウチョウボク属, フウチョウソウ科) と *Breynia* J. R. & G. Forst, 1775 (タカサゴコパン属; トダウイグサ科) がある。国際植物命名規約(1988)の保留属名表には後者が入っていて有効である。

J. ブラインの没年は1697 (Pritzel), 1716 (上野益三), 1797 (Stafleu & Cowan) などの諸説がある。

○J. P. ブライン (Johann Philipp Breynne, 1680—1764, ダンツィヒの医師)。(県植物誌, p. 1346)。

上述のJ. ブラインの子息でチョウセンニンジンの根の報告がある。ハラーによればこの人参の画は上手ではないという。

1. De radice Gin-Sem seu Nisi et Chrysanthemo bidente zeylanico, Acmeilla dicto. D. (praeside Fr. Dekkers.), Lugduni Batavorum, 1700).

ビョートル大帝は1716年ダンツィヒのJ. R. ブラインを訪ねロシアの自然誌研究の適任者の推薦を依頼した。彼は同郷のメッセルシュミット (Daniel Gottlieb Messerschmidt 1685—1735) を推挙した。Messerschmidia L. (スナビキソウ属) は彼が1724年中国領蒙古を探查した折りにダライノール付近で採集した植物に献名された属名である。スナビキソウ (*M. sibirica* L.) は県内では湘南と三浦半島の砂浜に分布している。

○ドイツ人の見た元禄時代—ケンベル展

ケンベル来航300年を記念してドイツ・日本研究所などの主催で昨年(1690)末から今夏にかけて、東京、

大阪、横浜（開港資料館）、長崎で盛大に催された。クライエル、マイステル、ケンベルの著者や植物標本などが展示されていた。またその国際シンポジウムや記念講演会が東京有楽町のマリオンホールや各会場で開かれた。その展示解説書や講演集録は今後ケンベルたちを研究する上に非常に重要な資料である。

植物標本、ケンベル関係、参考11：ヤマアサ（シマハマボウ）、チャ。参考12：イノモトソウ、ニシキノウ、ヨモギ、ハハコグサ。参考13：ヤマゴボウ、ユキノソタ、参考14：ウルシ。クライエル、マイステル関係。参考24：ヒノキ。参考25：チャ。

また「県植物研究史」に紹介しておいた彼らの著書は全部展示してあった。

○クライエル：日本植物観察記（県植物誌，p.1347）

「神奈川県植物研究史」ではとりあえずハラー著『植物文献集』によって分かった植物名を挙げておいた。その後小泉源一先生のブレ・リネー時代の植物研究史やエヴァ・S.クラフト女史の『アンドレアス・クライエル』、W. ムンツィクの注解付きのケンベル著『日本植物記』復刻版を入手することができて、解明できた和名も増えてきた。

ハラーが Tzadsinsic としたものはケンベル展に出ているクライエルの原書では Tzudtzinsic および Tzudtzinsic となっていて、ツツシと仮名が加えてあった。

小泉先生の報文で判明した和名は次の通りである。

Canschy（カジノキ）、Decku（ダイコン）、Dinnanscho（ムサシアブミ）、Fatasiro（アマドコロ）、Fiaku schiigua（ヒヤクジツコウ、サルスベリ）、Ghimi（ノヒメユリ）、Gummi（グミ）、Jaminaka（ミョウガ）、Jamaran（カンラン）、Kirama（ケラマツジ）、Meehebbii（マサキ）、Mitznofana（フデリンドウ）、Tschooditsoo（ソテツ）、Tzinsiqua（サザンカ）、Tzooschinkiku（シュウメイギク）、Vohsinafana（サワオグルマ）。

小泉説とムンツィク説が異なっている場合がある。

例えば Cumi Gummi（コゴメバナ④）は Come Gomme, (Mantees 満天星、ハクチョウゲ⑤) と、Itabe（イタビ④）は Itabu（イヌビワ⑤）と、Daniwathas（タニワタン④）は Tanna wattasi, Nysimi motsi,

（ネズミモチ⑥）と一致しない。当時通詞たちの意見が統一されていなかったのかも知れない。

なお、倉田著『日本主要樹木方言集』にはネズミモチの肥前、長崎の方言としてタニワタンを挙げてある。またクライエルの Zumani は日本植物友の会編『日本植物方言集，草本類篇』にハウセンカの佐賀、肥前、長崎方言として収録している「ツマネ」に関係付けられる。Meehebbii はマサキの平戸方言ミヤーベに基づいている。Ghimi の G はオランダ語では清音で、例えば Geerts（県植物誌，p.1368）もヘールツと読むので、Hime でヒメユリと関係を持っている。Insur は Iusura の誤植(?)でユスラウメと考えられる。

小泉先生は Vingan-Fana をヒガンバナに当てられているが、ハラーは De arbore Wiganfana, Liliacea としているので再考の余地があると思う。

次に同先生が和名を空欄とされている植物を考えてみたい。

1) Fickofax: ムンツィクはケンベルの Fekofatz を Hikohachi と考えジャリンバイを当てている。

2) Iosie: ハラーは Die Arundine Joosie と記している。arundo はラテン語でヨシ(アシ)のことである。

3) Iosie Mutzuba: Iosie はマイステルによれば Schoosie であるという。Mutzuba は恐らくミツバと思われる。またミツバツツジの可能性もある。

4) Koebe: マイステルの Coeba でアオキバの前半が消えて Cuba になったもので、アオキ (Aucuba) を指すと思われる。蘭語で oe は u と発音する。

5) Nisi: 上記の J. P. ブラインの報文表題中に De radice Gin-Sem seu Nisi とある。ラテン語の seu (sive) は英語の or なので、チョウセンニンジン (オタネニンジン) と考えられる。ハラーの『文献集』には De radice Ginsengh とある。

6) Nisum Schin s. rogat (ハラー)、Nisum Schin Srogat (クライエル)、Nisunschyu(n) Schrogath (マイステル): 総て同一種と思われる。Nisum Schin はニンジン、Schrogath はシロガシと読めないこともないが、はっきりしない。

(藤沢市藤ガ岡1-1-4-106)